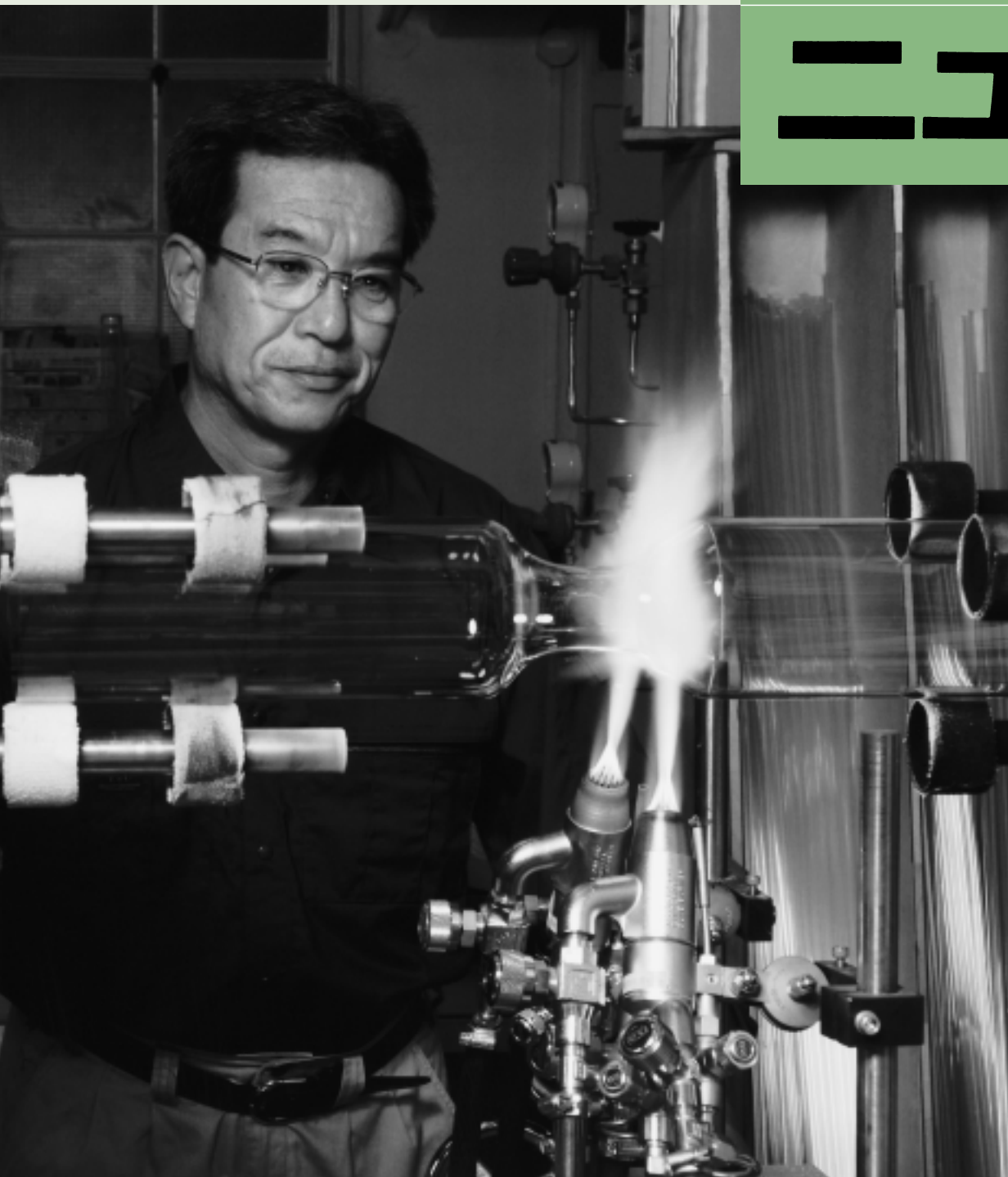


# 生研 ニュース

PHOTO 倉科満寿夫



IIS NEWS  
No.95  
2005.8

●試作工場  
技術専門職員  
滑川 敏夫

IIS  
TODAY

昭和54年から20年以上、試作工場でガラス加工を担当されている滑川さん。なんと、生研に来て初めてガラスを切ったとか。といっても、板ガラスの切断の話。それまでは試験器具のチューブ状のガラス加工がほとんどだったとか。それが、生研の試作工場では、幅広い要求に答えなければならず、板ガラスの切断に限らず、ガラスと金属の接合、ガラス製の蛇口の製作依頼など…。発注元も今では、生研だけでなく、先端研、教養学部にも広がっています。学生のポンチ絵のような依頼を見事に製品にしてしまう滑川さん。打ち合わせの最中に、どうしたら要求された製品が出来上がるかを頭の中で解

決してしよう。それでもまだまだ、出来ないこと、わからないことが多く、挑戦の毎日。しかし、そこは技術者、できないことはしゃくにさわり、試作工場の仲間と力をあわせて解決をめざしています。密かに、退職までにマスターしたい技術もあるとか。

「これまで、試作工場の中で、横のつながりから発想の転換ができたこともしばしば、だけど本当は縦のつながりでこれまでの経験を残していければ。」というコメントが印象的でした。

(腰原 幹雄)

## 先進モビリティ連携研究センター（ITSセンター）

先進モビリティ連携研究センター（Collaborative Research Center for Advanced Mobility：通称ITSセンター）は、次世代ITS（高度交通システム）の研究推進と、広くITS分野に関わる産官学連携および国際連携の拠点となることを目的として、奇しくも愛知万博開催の年、2005年3月に設置承認されました。ITSとは、Intelligent Transport SystemsあるいはIntelligent Transport Servicesと称される技術分野ですが、自動車をはじめとする交通インフラに高度なIT技術を導入することで、安全・安心で、環境に優しい、ヒトとモノの移動を実現し、またそこに豊かで適切な情報提供を行うことで、快適に暮らせる社会の構築を実現しようというものです。そのための総合的な社会インフラの整備と、様々な移動手段の開発、そしてそれらを利用するサービスの提供といった総てを包括するのが、このITSという分野となります。

ITSにおける研究開発は90年代より開始され、10年の黎明・発展期を経て、様々な要素技術が開発された第1ステ

ジを過ぎ、いまやそれらの技術をどのようにインテグレート（統合）するかという、第2ステージに入ってきたと言われています。この第2ステージにおいては、さらなる要素技術の開発とともに、それらを統合・融合する横断的サービスについての研究開発が重要課題とされています。

このように、ITSの第2ステージにおける研究開発では、これまで国内で行われてきたような官民主導による開発だけでなく、学による、特にユーザーの視点も踏まえた上での関与が重要となってきます。これまでの既成概念を取り払い、新たなサービスの展開を検討していくためには、若く柔軟な発想をする研究者、あるいは次世代を担いえる若手研究者予備軍を養成する学の活躍が、今後のITSのさらなる発展にとって必須であるといつて過言ではありません。また一方で、学においてはとかく従来のディシプリン型の縦割りの運営に分かれがちな傾向に対し、ITSに深く関係する、土木・都市交通工学、電子・情報通信工学、そして機械・制御工学、といった異なる分野を総

合・融合し、緊密な協力関係をもってあたっていくことが特に必要となります。その点で、産学連携に長い歴史を持ち、しかも広く工学分野全般に渡る研究室群が日常的に分野融合を行っているこの生産技術研究所に、国内の大学研究機関として初めてその拠点が設置されたことは、まさに必然的であり、かつその重要性は非常に大きなものと言えるでしょう。

現在センターでは、情報工学を専門とするセンター長の池内教授（視覚情報工学）を筆頭に、交通工学を専門とする桑原教授（交通工学）、車両制御工学の須田教授（制御動力学）に加え、システム制御工学の鈴木助教授（ロボティクス）と、民間の立場で長らくITSに関わってきた田中客員教授（ITS：国際・産学共同研究センター）、さらにスイスEPFLにて海外拠点構築を担うEdward Chung客員教授をコアメンバーとして、このほか生研7研究室、および学外メンバーなどのサポートメンバーによる強力なる協力も得て、今後ますます積極的に活動を行っていく予定です。

（機械・生体系部門 鈴木 高宏）



## 循環経済のためのサステイナブル材料戦略に関する 日中シンポジウム

UTフォーラムのサテライトシンポジウムとして生研が中心となって組織した標記シンポジウムが2005年4月29日(金)北京航空航天大学で開催され、約150名の研究者、学生等が参加した。当日、26件の多方面に渡る内容の研究発表(日本側7件、中国側19件)が行われ、大変密度の濃い会議となった。西尾副学長からは2030年ビジョンとして

Triple50戦略について、また前田所長からは日本の金属リサイクル及び廃棄物処理についての講演があり、UTフォーラム会場から駆け付けた小宮山総長は「構造化された知こそが人類の直面する地球環境問題、南北格差、人口増加の諸問題を解決できる」と強調された。最後に会議の総括を山本と王天民教授(北京航空航天大学)が行い、シンポジウム

は閉幕した。開催直前、日中間の政治的関係が緊張した場面もあったが、関係者の熱意により学術シンポジウムを滞りなく実施できたことは誠に嬉しい限りである。改めて日中の関係者の皆様に出席者を代表して厚く感謝申し上げる次第である。

(物質・環境系部門 山本 良一)



5月31日

構内環境整備の実施



## 生研公開開催される

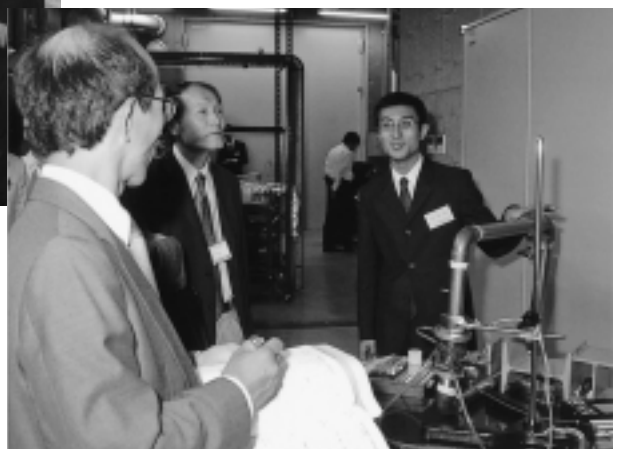
6月2日、3日の両日生研が一般公開され、小雨交じりのあいにくの空模様にもかかわらず、多くの訪問者でにぎわいました。各研究室がそれぞれ工夫を凝らした展示やデモを行う一方で、新しくオープンした綺麗なコンベンションホールでは講演会が開催され、地震や安全、環境といった身近な話題から暗号や音響センサーといった最先端技術まで幅広いテーマが取り上げられました。講演後に

は聴講者から多くの質問や意見が寄せられ議論が白熱しました。また、一階のピロティでも未来の交通機関などの大規模な展示に人の輪ができ、関心の高さがうかがわれました。

一方、SNG（Scientist for Next Generation）グループの企画で約300人の中学生、高校生が生研を訪れ、はじめて触れる先端科学の説明に真剣な眼差しで聞き入っていました。デモを説明する

研究室の学生にとっても、普段の研究成果を分かり易くまとめて説明する良い機会となり、充実した時間をすごせたようです。リサーチキャンパスに来場された方の総数は悪天候にもかかわらず昨年をしのぐ4,435人となり、主催者の一人としてほっと胸をなでおろしました。

（研究交流部会長 藤岡 洋）



## 中高生のための東大生研公開

本年も例年通り、本所の一般公開と平行して6月2・3日に「中高生のための東京大学生産技術研究所公開」が行われた。今年はWEBや日本経済新聞などを通して、多数の参加があった。特にリピーターとして参加する学校および学生が年々増加する傾向にあり、今年から新しく参加した学生とあわせて、全体の参加者は300名を超えた。

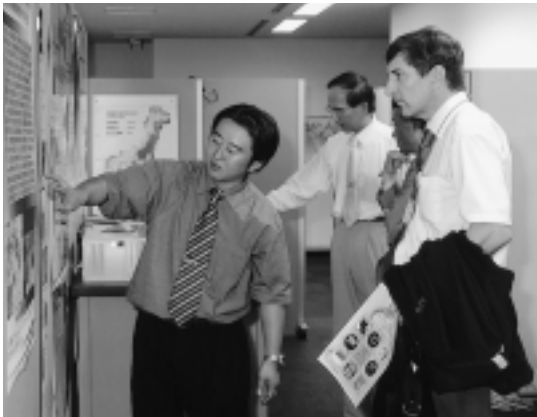
今年は参加者の増加に伴い、特別プロ

グラムに参加する学生以外には特に引率をつけず、一般公開と同様に各自、自由に見学するように形式を変更した。一方、特別プログラムは多くの申し込みがあり、急速新しく3研究室を見学するコースを作成した。当初は昨年との違いから問題がでるのではないかと心配されたが、滞りなく無事に終了した。今年も、多くの研究室にご協力をいただいた。この場をお借りして、ご協力いただいた研究室の

教員、職員そして学生の方、また事務の方々に御礼申し上げたい。

年々参加者が増えていく「中高生のための生研公開」である。システムの効率化を図り、来年についても計画していきたいと考えている。

(機械・生体系部門 大島 まり)



## 総合研究実験棟完成

待ち望んだ総合研究実験棟がとうとう完成し、5月31日(火)に内覧会が開催されました。地上7階、地下1階で延床面積は約5000m<sup>2</sup>です。以下にその概要をご紹介します。

2階のコンベンションホールは約260

席を有し、最大220インチのスクリーンと5.1chサラウンドの音響設備で迫力ある映像とサウンドを楽しむことができます。橘名誉教授と坂本助教授らにより講演仕様としての音響設計が行われました。その結果として平面形状がソラ豆形

になっており、“豆”を意味するフランス語にちなんで“Komaba Haricot (コマバ アリコ)”と命名されています。

2階のホールの隣には約360m<sup>2</sup>のホワイエもあり、会議のレセプションやポスターセッションなどに利用できます。また、3階には大会議室が、4階にはセミナールーム3室と小会議室3室が設けられ、以上が共用スペースとなっています。さらに、5階から7階と地下1階は居室・実験室仕様となっており、多様なスペースが提供されています。

現在、隣接する45号館の耐震改修工事が進められています。建物の補強を行うとともに、総合研究実験棟の2階と接続する渡り廊下も建設されます。実は、現時点ではホールまわりのトイレの数が不足していますが、この改修工事により、そのような弱点も解消される予定です。工事が続いて皆様にはご不便をおかけしますが、今しばらくのご協力をお願いいたします。

(キャンパス・施設部会長 古関 潤一)



## 生研記者会見報告

5月11日第54回記者会見

### 世界をリードするソフトウェアラインナップが完成 —「戦略的基盤ソフトウェアの開発」プロジェクトの研究成果—

計算科学技術連携研究センター長  
加藤 千幸教授発表



文部科学省ITプログラムの一環として生産技術研究所の計算科学技術連携研究センターを中心に進められている「戦略的基盤ソフトウェアの開発」プロジェクトでは、2005年6月にソフトウェアの最新バージョン14本の公開を予定しており、その中の代表的な4本のソフトウェアについて報告があった。はじめに代表者である加藤千幸教授から、プロジェクト全体の位置づけについて、産業に直結した日本発の実用的なソフトウェ

アを開発し、それによって産業技術のシミュレーションによる変革をもたらすことが目的であるとの説明があった。また、本プロジェクトは生産技術研究所を中核的な拠点としながら、国立医薬品食品衛生研究所や(独)物質・材料研究機構などと共同し、多数の研究者を結集して進められていることも紹介された。これに続いて、以下の4つのソフトウェアについて概要の説明があった。

- 1) タンパク質の精密な全電子計算を行うことによって、製剤の開発を加速する次世代量子化学計算システム「ProteinDF」
- 2) タンパク質と化学物質間の相互作用を第一原理計算に基づいて解析し、医薬品候補物質の探索や設計

を可能にする「BioStation」

- 3) ギガ・テラヘルツ帯での誘電・光学特性を原子レベルで計算でき、ナノスケールの光電子デバイス材料の設計に応用できる「PHASE/UVSOR」
  - 4) 大規模流体機械を丸ごと解析し、騒音源の特定ができる「FrontFlow」
- これらのソフトウェアはいずれも最先端かつ完成度が高く、PCクラスターレベルの計算機を用意すれば使用することが可能である。本プロジェクトによって開発されたソフトウェアの総数は今回の14本を加えて全56本を数え、そのダウンロード件数(利用数に対応)も年々増加して1万件を超えており、今後、産業界におけるシミュレーション技術の本格的な応用展開が期待できる。

(海中工学研究センター 藤井 輝夫)

5月12日臨時記者会見

### 生研技術研究所にITS研究センターが発足 先進モビリティ (ITS) 連携研究センター

機械・生体系部門  
鈴木 高宏助教授発表

前日の定例記者会見に続き、5月12日に、この春新たに発足した、先進モビリティ連携研究センター (ITSセンター) の紹介と、その主たる研究設備である、新しいドライビングシミュレータのお披露目を兼ねた試乗会が行われた。このシミュレータは、マクロ的な交通流シミュレータと、人間が運転操作するドライビングシミュレータの融合を図った、これまでにない新しいタイプのシミュレータ設備である。また首都高3号線をモデルとしたリアルな映像は、運転席を360度取り囲んだスクリーンに8つのプロジェクトから連動して映し出され、しかも従

来からの6自由度動揺機構に加え、今回新たに追加されたターンテーブル機構により、従来にないリアルな運転感覚を実現している。そして前述の交通流シミュレータにより生成される周辺車両は、それぞれが自律的な運転行動モデルをもってシミュレータ空間内を走行し、それによってシナリオによるのではない、ダイナミックでインタラクティブな交通流のシミュレーションを可能としている。

記者会見では、まず池内センター長によるセンターの紹介(前頁参照)に続き、須田教授によりドライビングシミュレ



タ設備の説明が行われた。連日の会見にも関わらず多数集まった記者達により、会見後の試乗会まで積極的に質疑が交わされ、一般からの関心と期待の高さを強く感じさせるものだった。

(機械・生体系部門 鈴木 高宏)

## 生研同窓会総会およびパーティが開催される

生研公開の初日（6月2日）の午後4時30分より、生研同窓会総会が開催されました。増子会長による開会の辞で始まり、浦教授（所内同窓会幹事）と三浦事務部長（同）により、平成16・17年度の事業報告と会計報告、ならびに事業計画と予算案が報告されました。岡田副会長の閉会の辞で総会が終了し、引き続き、竣工ほやほやの総合研究実験棟2階のコンベンションホール前ホワイエで懇親会が開催されました。第二工学部第一期生の元良誠三先生による乾杯の音頭で始まった懇親会は、顧問研究員の皆さんの参加もあり大いに盛り上がりしました。途中、5部の川口研究室と共同開発された紙テトラ（顕原テトラ）の実演が顕原正美氏によって行われ、参加者一同

も見様見真似でこれを作成しお土産としました。同じく会の途中で撮影した参加者全員の集合写真を即座にプリントし、記念品として持ち帰っていただき好評を得ました。最後は、岡田副会長による「みんな、今日は楽しかったかあ?」、参加者一同「おー」の元気な閉会の辞によってお開きとなりました。

生研同窓会は、東京大学第二工学部、工学部分校、生産技術研究所の卒業生や修了生のみならず、教職員、研究員（生）、事務補佐員など、何らかの身分を有した方々（現役を含む）は誰でも入会資格を有し、しかも会費を義務としないなど、非常にユニークな同窓会です。会の運営は会員の自由意志による維持会費とその利子によって行われています。

次回の会合は、11月11日（金）に、千葉実験所の一般公開に合わせて、西千葉の実験所で生研同窓会の懇親会を予定しています。また、生研の国際的な研究活動と海外の同窓生の活動をサポートするために、現在、海外支部の展開を企画しています。

なお生研同窓会の詳しい情報は生研ホームページの<http://www.iis.u-tokyo.ac.jp/alumni/index.html>で見ることができます。

（生研同窓会所内幹事 目黒 公郎）





# VISITS

## 生研訪問者

5月31日(火)

フランス共和国 フランス国立科学研究センター一行  
Robert PLANA 情報通信科学技術部門長 他2名

6月8日(水)

中華人民共和国 武漢理工大学一行  
Lianmeng ZHANG 副校長 他2名

## 外国人研究者講演会

主催：(財)生産技術研究奨励会

6月20日(月) 司会：教授 桜井 貴康

Dr. Shekhar BORKAR  
Intel Fellow and Director of Microprocessor Research, Intel Corporation, USA  
VLSI DESIGN CHALLENGES FOR GIGASCALE INTEGRATION

6月20日(月) 司会：教授 田中 肇

Dr. Xue-Feng YUAN  
Reader, Manchester Interdisciplinary Biocentre, The University of Manchester British  
BIORHEOLOGY : QUANTITATIVE CHARACTERISATION OF BIOFLUIDS AND BIOMATERIALS

7月4日(月) 司会：助教授 岡部 徹

Dr. Johan NELL  
Manager, Mintec, South Africa  
MELTING PLATINUM GROUP METAL (PGM) CONCENTRATES IN SOUTH AFRICA

7月4日(月) 司会：教授 荒木 孝二

Dr. Sinha, CHITTARANJAN  
Reader, Jadavpur University, India  
3D BLOCK TRANSITION METAL CHEMISTRY OF ARYL-AZOIMIDAZOLES

7月4日(月) 司会：教授 荒木 孝二

Prof. Mishra, LALLAN  
Banaras - Hindu University, India  
BIOLOGICAL ASPECTS OF METAL COMPLEXES

7月5日(火) 司会：助教授 羽田野 直道

Prof. Bikas K. CHAKRABARTI  
Saha Institute of Nuclear Physics, India  
AN IDEAL GAS-LIKE MODEL OF MARKET AND INCOME DISTRIBUTIONS IN SOCIETIES

7月8日(金) 司会：教授 桜井 貴康

Dr. Ali KESHAVARZI  
Senior staff research scientist at Microprocessor Research Laboratories, Intel Corporation, USA  
PARAMETER VARIATION IN SCALED CMOS CIRCUITS

## 外国人客員研究員

氏名	国籍・現職	研究期間	受入研究室
MIHALJEVIC, Miodrag	セルビア・モンテネグロ・セルビア科学アカデミー 教授	2005. 4.28～2005. 8.20	情報・エレクトロニクス系 今井研究室
BAHL, Rajendar	インド・インド工科大学デリー校 教授	2005. 5.23～2005. 7.22	海中工学研究センター 浦研究室
ZHU, Hongmin (朱 鴻民)	中華人民共和国・北京科学技術大学 教授	2005. 7. 1～2006. 6.30	サステイナブル材料国際研究センター 岡部研究室
COLE, Raymond John	カナダ・プリティッシュコロンビア大学 教授	2005. 9. 1～2005.10.30	人間・社会系 野城研究室

## 博士研究員

氏名	国籍・現職	研究期間	受入研究室
LI, Guoqiang	中華人民共和国	2005. 5.20～2007. 5.19	物質・環境系 藤岡研究室
DUTTINE, Antoine Gerard	フランス共和国	2005. 6.30～2006. 6.29	人間・社会系 古関研究室
ASHDOWN, Mark Simon David	英国	2005. 8. 1～2006. 7.31	戦略情報融合国際研究センター 佐藤研究室



## CIRMM パリ オフィスから

CIRMM パリオフィス アシスタント  
藤岡 典子

留学や仕事の体験を通して、フランスには遊びで行くのが一番と心に決めていたのにどういいうわけかフランス人の夫と結婚してフランスに住むようになって15年。

2003年9月からCIRMMパリオフィスで、アシスタントとして働いています。

パリオフィスはエッフェル塔のすぐ近くにあり、通勤で毎日セーヌ川を渡る度に、やっぱりエッフェル塔はきれいとはうっとながめているのは私ぐらいでしょうか。街並の美しさは実家のそばの甲子園商店街とは比べようありません。

パリオフィスでの私の仕事は日本人研究者の方のバリ滞在のお手伝いです。一口にお手伝いと言っても、定期券の買い方のような日常生活の細かな事から滞在許可証取得の手続き、また会議の際のスピーチの通訳など多岐に渡ります。訪問者の方が快適なバリ滞在を過ごせるようにオーガナイズするわけですが、フラン

ス人スタッフに何か依頼する際は最後の最後まで気がぬけないことが多々あります。どこかで連絡が消えていってしまうのです。不思議、不思議。

また通訳の際、日本人の先生方のスピーチなどは、打ち合わせ通り、一言一句違うことなく、私が話す間合いなど反対にお気遣いいただきとてもやりやすいのですが、フランス人のスピーチは途中で気ままに付け加えたり、省いたり、第一秘書が渡してくれた原稿と違っていたりして、小心者の私はひやひやすることしきり。

こんなふうにしてスピーチの内容が変わるのは気のむくままにという個人主義的な性格からなのか、それともパリが芸術の都と言われる所以の自由な発想によるものからなのでしょう。とにかくこの頃ではà la françaiseねと考えて納得しています。



# PERSONNEL

## 人事異動

発令年月日	氏名	異動事項	新官職(所属)	旧官職(所属)
17. 5. 1	吉中 進	採用	助手 人間・社会系部門	
17. 5. 1	牧野 貴樹	称号付与	産学連携研究員(特任助手)	
17. 5. 1	田中 剛平	称号付与	特定プロジェクト研究員(特任助手)	
17. 5. 1	陳 天恩	採用 称号付与	特定プロジェクト研究員(特任助手)	
17. 5. 1	井上 麻子	配置換	総務課 総務係主任	研究協力部国際課 主任
17. 5.31	川口 博	辞職	国立大学法人神戸大学工学部助手	助手 情報・エレクトロニクス系部門
17. 6. 1	高宮 真	配置換	助教授 大規模集積システム設計教育研究センター	助教授 情報・エレクトロニクス系部門
17. 6. 1	光田 好孝	昇任	教授 物質・環境系部門	助教授 物質・環境系部門
17. 6. 1	高宮 真	兼務	助教授 情報・エレクトロニクス系部門	助教授 大規模集積システム設計教育研究センター
17. 6. 1	Chung Edward	委嘱 称号付与	講師(客員教授)	
17. 6. 1	竹原昭一郎	職名変更 称号付与	特定プロジェクト研究員(特任助手)	
17. 6. 1	DMITRIEV Sergey Vladimirovich	新規	外国人研究員 客員教授	
17. 5. 1	高橋 良至	称号付与	産学連携研究員(特任助手)(国際・産学共同研究センター)	
17. 5. 9	SHLADOVER Steven E	新規	外国人研究員 客員教授(国際・産学共同研究センター)	
17. 7. 4	BEKHOR Shlomo	新規	外国人研究員 客員教授(国際・産学共同研究センター)	

# PERSONNEL

## ■昇任のご挨拶

物質・環境系部門 教授

光田 好孝



2005年6月1日付けで教授に昇進し、リサーチマネージメントオフィス（RMO）室長を拝命いたしました。2003年12月から2年余文部科学省にて併任（法人化後は非常勤）として高等教育行政に携わってきた経験を生かして、生研の研究活動が円滑に進行するようにRMO室長として努めたいと思います。と同時に、生研という優れた研究環境の中でナノ材料研究についても、これまで同様すすめていく所存です。今後とも、よろしくお願ひ申し上げます。

## ■新任のご挨拶

先進モビリティ連携研究センター  
客員教授

Chung Edward  
(チャン エドワード)



Greetings from Switzerland

Before joining the University of Tokyo, I worked in Australia after receiving my PhD in Traffic Engineering from Monash University. From 2002 I took up the position of Visiting Professor at the Center for Collaborative Research, University of Tokyo. Initially only planned to spend a year in Tokyo but the good support I received at Kuwahara Laboratory saw me extending my stay to 3 years. Since April 2005, I moved to Switzerland and I am now heading the ITS group at LAVOC, EPFL (École Polytechnique Fédérale de Lausanne) in Switzerland. LAVOC is engaged in Swiss and EU research projects and is actively expanding its ITS research activities.

I am very honoured to be appointed an Adjunct Pro-

fessor and core member of the Collaborative Research Center for Advanced Mobility (ITS Center). I continue my participation in the ITS Center's activities through regular visits to Tokyo every couple of months.

With LAVOC acting as a European hub for the ITS Center and a formal collaboration agreement between LAVOC and ITS Center to be signed in October, I am quietly confident that this collaboration will be fruitful. Already Kuwahara Laboratory and LAVOC have had 3 successful years of student exchange program. I am looking forward to contributing to the collaboration and to the success of the ITS Center.

基礎系部門 客員教授

Sergey V. Dmitriev  
(ドミトリエフ セルゲイ  
ウラジミールヴィッチ)



Born in Siberian city Tomsk and graduated from Tomsk State University in 1984. This is the oldest University in Siberia and Far East, established by Russian czar Alexander II in 1877. Came to Japan ten years ago. Worked at the University of Electro-Communications, Shigenari Lab. This is my fourth year in IIS, Yoshikawa Lab. Experience in Mechanical Engineering (instability and buckling), Solid State Physics (phase transitions), Nonlinear Science (solitons and fractals). Hobbies: Japanese, photography, fishing.

## ■採用



●助手  
吉中 進

## ■配置換



●総務課  
井上 麻子

# INFORMATION

## ■平成17年度外国人研究者・留学生との懇談会の開催について

今年度の外国人研究者・留学生との懇談会を、右記により開催いたします。

外国人研究者・留学生とその家族の方々、関係教職員の方々の参加をお待ちいたします。

\*日時：平成17年10月7日(金) 16:30～18:30

\*場所：駒場リサーチキャンパス中庭

\*会費：無料

# AWARDS

所属	職・氏名	受賞名・機関	受賞項目	受賞日
機械・生体系部門	助教授 白樫 了	日本冷凍空調学会賞 学術賞 (社)日本冷凍空調学会	凍結ゼラチンゲル内水結晶の非破壊計測法に関する研究 —誘電特性を利用した氷結晶構造の推定—	2005. 5.16
人間・社会系部門	教授 加藤 信介	功績賞 (社)空気調和・衛生工学会	換気基準および換気効率現場測定法の海外動向調査とその標準化	2005. 5.17
人間・社会系部門	教授 加藤 信介	功績賞 (社)空気調和・衛生工学会	SHASE-S116-2003 トレーサガスをを用いた単一空間の換気量測定法	2005. 5.17
人間・社会系部門	教授 加藤 信介	空気調和・衛生工学会賞 (学術論文部門) (社)空気調和・衛生工学会	設計過程の階層構造を考慮した室内環境最適化手法に関する基礎的研究 第1報 第2報	2005. 5.17
情報・エレクトロニクス系部門	技術職員 岡部 孝弘	PRMU研究奨励賞 (社)電子情報通信学会 情報・システム ソサイエティ パターン認識・メディア 理解研究専門委員会	近接光源下における物体の見えの近似のための画像分割とその効果	2005. 5.19
情報・エレクトロニクス系部門	教授 藤田 博之	第14回業績賞 (社)電気学会	マイクロマシン (MEMS) 技術発展への貢献	2005. 5.20
人間・社会系部門	助教授 川口 健一	膜構造研究論文賞 (社)日本膜構造協会	空気膜構造のインフレート過程と膜の畳み込みに関する一連の研究	2005. 5.27
人間・社会系部門	助教授 大岡 龍三	空気調和・衛生工学会振興賞技術振興賞 (社)空気調和・衛生工学会	福井県教育センターの建築設備	2005. 5.27
機械・生体系部門	助教授 白樫 了	優秀論文賞 日本機械学会熱工学部門 第42回日本伝熱シンポジウム実行委員会	容積感受性チャネルを利用した動物細胞内への耐凍結・乾燥性糖類の導入に関する研究	2005. 6. 7
情報・エレクトロニクス系部門	教授 榊 裕之 東北大学教授 大野 英男	日本学士院賞 日本学士院	半導体ナノ構造による電子の量子的制御と強磁性の研究	2005. 6.13
情報・エレクトロニクス系部門	教授 榊 裕之	向井賞 (財)東京応化科学技術振興財団	半導体ナノ構造の形成・評価法と新素子応用の開拓	2005. 6.21

## ・ PROMENADE ・

### 日本での感想

タイから来た留学生の私は現在桜井研究室博士課程3年生になっています。約3年前、私は成田に着きました。二つのスーツケースと、タクシーで東京大学の駒場ロッジに到着しました。メーターの数字は激しく上がってきて、金額がとても気になりました。やはり、物価が違うことを改めて感じ始めました。日本で初めての食事はコンビニ弁当でした。日本人にとっては、味があまり美味しくないかもしれませんが、そのときの私にとっては意外と美味しかったのです。タイで色々な日本料理を食べたことがありますが、本場で食べる日本料理の方がとても美味しいと思いました。ところで、一番驚いたのは日本の家です。タイの家のほうが数倍広いです。例えば、40平米できれいなマンションの場合は家賃が2万5千円以下で借りられます。部屋の広さは一番ショックだったことです。

最初、全く日本語を話せない私が日本で生活することは容易ではありませんでした。日本に到着してから、約3週間後、生研にある桜井研究室の研究生として、日本語の勉強を始めました。授業はもちろん全て日本語でやりました。当然、最初は全く理解出来ませんでした。日本語に慣れるまで、待つしかできなかったのですが、一つの努力は英語を喋らないようにして、できるだけ日本語を使うように心掛けました。しかし、限界がありました。入学試験や研究

などの時は英語を使わないと、勉強ができないからです。日本語の難しさを痛感しました。日本語の勉強のため、色々な国際交流活動にも積極的に参加しました。日本人のボランティアなどと話せば、日本文化も日本社会も日本語と同時に勉強できると思ったからです。食文化や昔話など、面白い話もたくさん聞きました。



日本語の授業が終わってから、入学しました。タイで勉強した分野を続ける私にとって、日本の大学の方が研究に適した設備が整っていると思いました。私には、測定器の数だけでも、驚きました。生研の中には様々な研究室があって、各研究室にクリーンルームまで完備されているのは、大変驚きました。研究の設備以外でも、生活用の設備までも整っており、快適な環境だと思います。

タイにいた時に、日本に留学すれば日本語の問題などがあるので、日本に来るかどうかが悩みましたが、今は日本に来て良かったと思っています。

(情報・エレクトロニクス系部門 桜井研  
博士課程3年 Atit Tamatran)

# REUNION INFORMATION

生研同窓会会員の声

## 「生研同窓会の思い、 多数御参加へ檄」

(有)エヌ・ケイ・アール代表取締役 <sup>にかみ</sup>二上 <sup>かをる</sup> 夢  
第二工学部・在学期間（1944年～1947年）



### ●プロフィール

昭和22年9月東京帝国大学第二工学部冶金学科卒業。日本鋼管(株)に入社し、後に東伸製鋼(株)へ。昭和63年高齢化社会の人材活性化のために研究試験調査会社NKRを設立主宰。

6月2日、生研公開の日を期して、駒場リサーチ地区生研に新築の総合研究実験棟（A棟）3階で生研同窓会総会が開かれた。増子会長の開会の辞で始まり、簡潔明快なる議事進行、岡田副会長の閉会の辞で修了、引き続き行なわれた懇親会、奇しくも大安吉日の今日が使い初めという2階のコンベンションホール前ホワイエで、暮れなずむ小雨模様ながら多数参加、盛会であった。総会での会長、副会長の御挨拶の中に、特に第二工学部出身者にとってはこの会の意義と発展を願う含蓄ある御言葉が印象に残った。

増子会長は良く透る御声で生研発足のときのエピソードを話された。昭和24年、第二工学部廃止に関し当初、当時の冶金の金森九郎教授が職を賭して反対表明をされたということ、しかしその後、生研が誕生し、本郷千葉と一体となって立派な東大工学部として発展し、六本木の地に二工記念館も計画とか。岡田副会長、閉会の辞の中で、今まで同窓会についてはあまり関心なく殆ど不参加、しかし生研同窓会に関してはその思いは変わった、大いなる会の発展、会員の多数ご参加をと締めくくられた。

金森教授表明の御心は、第二工学部は千葉の田舎、松林、芋畑にかこまれ、質実剛健、家族的、旧制高等学校のよさが残っている、戦後の心の荒廃、混乱、何とか昭和22年で帝国の名前が消えた東京大学の片隅にでもこのよさを残して国運の向上に寄与したいとの切々たる思いか。その後の工学部、また新設の生研、今日にいたるもこの思い、十二分に生かされている、今後もご安心と御期待をとの会長の力強い御気持ちを読み取れた。

岡田副会長の同窓会観転換の意味、御質問への御答え、

懇親会での懇談を含め、十分御理解できた。単なる同窓親睦だけの会ではない二工、生研何らかの縁に結ばれた人々が共生の実を示す一つの場としての存在意義、ホームページの解説にも、「会員の親睦を深めるとともに、生研を核とした研究・技術情報のネットワークを築き、併せて生研の研究・教育活動を応援するための会です…」とある。

第二工学部卒業生など夫々のクラス会、同窓会などがある、屋上屋を重ねて改めて生研同窓会？との疑問。しかし単なる同窓親睦のみの会ではない多角的な活動を、高年化社会、花鳥風月を友にするのみでなく折角の経験を現代社会に還元寄与し、隣は何をする人ぞの世相を改め、国立大学法人化、経済万能の風潮に流れることなく土俗的なよさを残して、とのこの会の意味の御理解を。

なお漏れ承れば昭和29年、白線浪人救済の為の最後の二工卒業生（書類上は26年で二工の名は消えている）毎年行なっていた全学科一堂の同窓会、昨年で休止、生研同窓会設立もその代行もかねてとの温かい御心も含まれているとか。また維持費、各人の自由に任せるとか、古きよき時代の自由と自治の精神、脈々としてあり、新しい時代の幕開けのためにも特に二工、関係者、この会に名を連ね大いに有効活用されることを、人生出会いの有難き奇しきご縁を感謝いたします。

## 生研同窓会について

生研同窓会は、東京大学生産技術研究所（生研）、第二工学部、工学部分校に教職員や院生等として在籍された方の集まりで、会員の親睦を深めるとともに、生研を核とした研究・技術情報のネットワークを築き、併せて生研の研究・教育活動を応援するための会です。資格をお持ちの方がお申し出により会員になることができます。ふるってご入会下さいませようお願い申し上げます。

※「REUNION INFORMATION」は会員のみなさまの原稿を募集しております。在籍時代の思い出、同窓会への期待等、ふるって投稿ください。

### ●問い合わせ先

生研同窓会事務局（事務部総務課広報企画係内）  
ホームページアドレス <http://www.iis.u-tokyo.ac.jp/alumni/>  
電話 03-5452-6017、6018 / FAX 03-5452-6073  
メールアドレス reunion@iis.u-tokyo.ac.jp

# 起業家募集

## — 第3回 東京大学学生発明コンテスト —

若くて柔軟な君の頭脳は、「ひょっとしたらものすごい発明」につながるアイデアの宝庫。一見ばかばかしそうなアイデアも、磨きようによってはきらりと光るもの（と妄信しましょう）。研究活動に限らず、豊かな発想を実に結びつかせてみませんか。生産技術研究所では、異色の人材とアイデアを支援するべく、発明コンテストを企画しました。ひょっとしたら「起業家」になれるかもという甘い気持ちは大歓迎です。奮ってご応募ください。

- **応募資格**：東京大学の学生（学部学生・大学院学生）
- **コンテスト申し込み応募期間**：  
2005年7月1日（金）～2005年9月15日（木）（必着）  
※応募用紙は6月中旬から配布いたします。
- **発明コンテスト日程**：  
2005年10月中旬 書類審査終了 予備審査結果の通知  
2005年11月26日（土） 本審査 プレゼンテーション  
2005年12月上旬 審査結果の通知  
2006年1月12日（木） 表彰式
- **発明内容**：発明の分野や内容、実施の度合いは問いません。但し、「特許法上の発明」（自然法則を利用したアイデアで、産業上利用できるもの）に該当しない場合は審査対象にならない可能性があります。
- **提出書類**：応募用紙表紙（様式A）……………2部  
発明説明書（様式B、A4版タテ記述自由形式）……………2部  
発明確認シート（様式C）……………1部  
応募用紙の様式A、Bの内容を含む電子媒体……………1部  
※応募用紙は以下のホームページからダウンロードできます。第1回および第2回の本コンテストの詳細も見ることができます。  
<http://hatsumei.iis.u-tokyo.ac.jp/>
- **審査**：東京大学生産技術研究所産学連携委員会、財団法人生産技術研究奨励会－TLO（生研TLO）、弁理士で行う予定  
※審査においては、特許性よりもアイデアを重視する予定です。
- **表彰**：最優秀賞、優秀賞、アイデア賞等  
表彰式において賞状、賞金、記念品が授与されます。  
※発明者が希望する場合、優秀な発明に対しては生研TLOが特許出願の協力をを行います。
- **問い合わせ先**：  
〒153-8505 東京都目黒区駒場4-6-1 東京大学生産技術研究所内  
（財）生産技術研究奨励会 発明コンテスト係  
電話：03-5452-6097 Fax：03-5452-6096 e-mail：fpistlo@iis.u-tokyo.ac.jp

### ■編集後記■

梅雨入り直後には雨が降らず、水不足が懸念されていたのもつかの間、各地で大雨による災害が発生し、自然の気まぐれを目の当たりにしています。生研では、総合研究実験棟が完成し、徐々にキャンパスの全体像が浮かび上がっています。総合研究棟前の庭は、あつという間

に青々とした草木で覆われ、食堂へのけもの道も、これもまた、自然の力。自然と建築の調和のとれたキャンパスへ変貌していくことを願っています。

（腰原 幹雄）

■広報委員会 生研ニュース部会  
〒153-8505 東京都目黒区駒場4-6-1  
東京大学生産技術研究所  
☎(03)5452-6017内線56017、56018  
■編集スタッフ  
竹内 昌治・松本 益明・高宮 真  
北條 博彦・腰原 幹雄・三井 伸子  
E-mail：iisnews@iis.u-tokyo.ac.jp  
生研ホームページ  
<http://www.iis.u-tokyo.ac.jp/>